



親鸞聖人 750 回 大遠忌



「無財の七施」の心にて 一大遠忌法要を迎えるにあたって―

(やすこうち よしのぶ)
安河内 好信

私は60年の年月を経て^{ぶつえん}仏縁^{であ}に出遇わせていただきました。自己中心的な生き方しかしてこなかった自分が変わったのは、いったいどのようなきっかけだったのかと思うと、まずは、^そ組の連続研修会に参加したことです。

父を亡くし気も落ちこんでおりましたところ、お寺のご住職から、「連続研修を受けませんか」と誘われたのです。「えっ？この私が？」「そうです。あなたです！」「私でいいんですか？」「ハイ！あなたがいいんです！」。このご住職の勧めがなかったら、おそらく私は「一生仏縁に出遇わなかった」と、今でも思っております。そして、連続研修会の最終日^{そちょう}に組長より、「これから先、あなたがたにも私にも、いろいろなことがふりかかってまいります。その時に、この連続研修で学んだことは、このことだったんだと思われることを願っております」との言葉は、今でもとても印象に残っています。

またその後、「門徒推進員中央教修」に参加した時のことです。「浄土」についての話し合い法座の中で、「あなたは、だれに助けられましたか」との問題提起を受けました。この提起がされたとき、これまで私の心の中で封印していたものが一気に崩れおちました。それは、今から17年前に発刊された『めぐみ』（第143号／平成5年10月1日発刊）の特集「総裁さまを囲んで―お念仏

にかおる家庭と仏教婦人会活動一」の中で、私の母が語った話を思い出したことです。

母は、私を育てていた頃のことをふり返りながら、「歩みはじめた頃に^{こかんせつ}股関節をいためました。(中略)運動会で息子が元気に走る夢を見ましてね。そしてふっと目がさめて、ああ夢やった……と思いながら、ずっと育ててきました」と、語っています。

私はこの文章を読んだ時、初めて母の心を知りました。私は中央教修の話し合い法座で恥じらうこと、照れることもなく、心の底から「母さん、ありがとうございます。産んでくれてありがとうございます」と涙を流しながら言う自分と、それを聞いてくれる法座の仲間、そして自分の思いを言える場所が、ここにあると実感したのです。それが、本願寺でした。

このような連研と中央教修での経験があったからこそ、素直な心になれたし、さまざまなお寺の行事にも進んで参加できるようになれたのだと思っておりま

す。

そのような仏縁に出遇った私は、昨年の「大谷本廟親鸞聖人750回大遠忌法要」において、門徒推進員の奉仕員を募集すると知り、私の「できるかぎり」ご奉仕させていただこうと、自分に言い聞かせて応募して、奉仕させていただいたのです。

その奉仕の中で私は、「ようこそお参りになられました」「ようこそのお参りでした」と、参拝者に声をかけさせていただきました。しかし、ご挨拶^{あいさつ}をしながらも、私は、本当に「できるかぎり」ができているのだろうか、ただ、頭を下げながら「ようこそお参りになられました」を、型通りにあてはめているだ

けのお迎えしかできていないのではないのだろうか、自分の姿勢になんとかく疑問を持ちながらの奉仕になってしまいました。

そんな思いを持ちながら、今年の『大乘』12月号を読んでおりましたら、たまたま私が奉仕している姿が掲載されており、自身の奉仕活動写真を見たとき愕然がくぜんとしたのです。参拝者に接する私の表情には笑顔がなく、あたたかいまなざしがなかったのです。自分の「できるかぎり」の「無財むざいの七施しちせ」ではなかったのです。そのことが、なんとなくの疑問だったのだということに気づきました。そのことに気づかせていただいたことで、笑顔で、やさしい言葉で「ようこそそのお参りでございます」「ようこそそのお参りでございました」とお迎えできなかったことを深く反省することができました。

すると、すぐに反省の思いを実践する機会をいただくことができました。平成22年御正忌報恩講ごしょうきほうおんこうに、ふたたび門徒推進員として奉仕させていただくことになったのです。

今年の1月14日～15日、母と妻と三人での参拝でございました。母も年を重ねました。私が奉仕員として、本願寺で活動する姿を母に見てもらいたい一念で、奉仕の申し込みをしたのです。この姿を母だけには見てもらいたい。それが母の望んでいた念仏相続ではないかと思ったからです。

当日はとても寒い日でした。御影堂向拝ごえいどうごはいにて、参拝者に靴袋くつぶくろの配布をするのが私の役割でした。今度は、「ようこそお参りになりました」と、笑顔とやさしい言葉でお迎えすることができました。それも涙を流しながらのお迎えでした。

おじいちゃん、おばあちゃんが、向拝の階段を一段一段と這うように上がり、御影堂に進まれる姿を見た時の感激は忘れもしません。その背中が無言で、「この姿を忘れるんでないぞ！」と、私に語りかけてくださっているように感じました。その姿は、逆に私へのご奉仕なのだと思います。「おじいちゃん、おばあちゃんありがとうございます。ようこそ、ようこそお参りになりました」。このとき初めて、これが自分のできる範囲で実践する「無財の七施」なのだと思えたとめさせていただきました。

私は62歳を過ぎました。若いころにはもっと歳をとってからと思っていた私も、もっと若い時に仏縁にお会いできていればと思える歳になりました。来年は、親鸞聖人750回大遠忌法要をお迎えいたします。私は思います。仏法は、人を通して伝わるのです。本願寺を仰ぎみすに、次世代の方たちにも、必ずこの私がいただいたおみ法に出遇えた喜びを、伝えていくことができると信じております。

今後も、門徒推進員にご奉仕の要請がありますならば、飛んでまいります。「無財の七施」の心にて精いっぱいご奉仕させていただきたく思います。

(福岡教区 粕屋組 明覚寺 門徒)